# 公益社団法人　足立法人会　会長賞

## 「税の役割と将来の自分との関わり」

足立区立 第十一中学校

三年　栗原　陽人

私が授業の時に「税金」について学習した時、自分には遠い話のように感じられた。普段意識する税金といえば、コンビニで買い物をした時に払う消費税くらいだからだ。しかし、私たちもあと数年すれば社会に出て、税金を納める側になる。私たちが三十代となる二十年後、税の仕組みや役割はどう変化しているだろうか。私はそこに興味を持ち、現在の税金がどのような目的で使われ、環境問題などにどう関わっているかを調べてみた。

まず、自分が住む足立区の環境への取り組みに注目した。足立区では省エネやごみ減量リサイクルなど、環境を守るための様々な取り組みが行われている。このような活動を支えるお金の一つが税金である。つまり税金は学校や道路、福祉だけでなく、私たちの暮らしや環境を守るためにも使われているのだ。さらに調べると二十年後に向けて税金と環境の関係はもっと変わる可能性がある事を知った。それは、「環境に負担をかけた量に応じて税金を負担する」という考え方である。

現在少子高齢化が進む中、二十年後には働く世代がさらに減り、高齢者を支える費用や道路などの維持費が増えることが予想される。そのため、これまでと同じ方法だけで税金を集め続ける事が難しくなるかもしれない。

そこで注目されているのが「炭素税」である。これは二酸化炭

素を排出する燃料などに課税し、環境への負担が大きい活動ほど多く税金を支払うという考え方だ。また、自動車についても、走った距離に応じて税額を変える「走行距離課税」という考え方が議論されていることを知った。

これまでの税金は、所得や買い物の金額などに応じて払うものが中心だった。しかし今後は、「どれだけ社会や環境に負担をかけたか」という視点も、税金の重要な考え方になってくるかもしれない。もちろん学校や病院、消防など誰もが必要とするサービスは、これからもみんなで税金を出し合い支える必要がある。一方、環境への影響が人により異なる物については、「みんなが同じ負担」ではなく、「負担量に応じて納める」という仕組みが広がるのではないだろうか。

私は二十年後の税金は単にお金を集めるためだけでなく、持続可能な街や地球環境を実現するための「社会のルール」としての役割が強くなっているのではないかと思う。

今回、足立区の取り組みや将来の税金について調べて、税金は自分とは遠いものではないと分かった。将来私が税金を納める立場になった時、税金をただ「払わなければならないお金」と考えるのではなく、自分たちの社会を支えるために、みんなで負担するお金だと考えたい。そして二十年後には税金がどのように使われ、地域や社会の未来にどう役立っているのかに関心を持ち続けられる大人になりたいと思う。